少年少女のための

現代日本文学全集

6

島崎藤村集

責任編集
久松潜一
伊藤整
福田清人

少年少女のための現代日本文学全集

NDC 918.6

少年少女のための
現代日本文学全集 6

島崎藤村集
定価 二五〇円
昭和三十年六月二十七日初版発行
昭和三十一年十一月十五日再版発行
発行者 小嶺嘉太郎
発行所 東京丸ビル 東西文明社
営業所 千代田区神田神保町二ノ二一

印刷 東京印刷株式会社
製本 協和製本所

この本を読む人に

すぐれた文学者は、この世や人間の真実や、美をするどくみつめて、その作品にはっきりとえがいてくれております。私たちは、それを読むことによって、私たちの心をゆたかに、美しくすることができます。

この本には、そうしたすぐれた作家たちの代表的な作品のなかから、さらに少年少女のみなさんが、読むのにふさわしいもの、ぜひ読んでもらいたいものを、えらんでのせてあります。そして学校で教わらないむずかしい漢字は、かなに改めたり、その意味をしるしたり、またかなづかいも、現代かなづかいになおして、みなさんにしたしみやすいようにしてあります。

その作品も作家のいろいろな面を示すようにしてありますが、あまりに長すぎて、この本にのせきれない作品や、もっとおとなになってから読んだほうがいい部分をふくむものは、その一部をとってのせてあるものもあります。その部分のとりかたもくふうして、その作品のあらましを知られるようにつとめました。

しかし、もちろん原作をこのように改めたといっても、原作の意図およびそ

の味わいなどは、できるかぎり、そこなうことなく伝えることができるよう苦心しました。だから実際は、このままを原作と考えても、さしつかえがないと思っております。

最後に、解説として、その作家の一生や、その作品の説明がつけられております。一つの作品をよく味わうには、それがどのような作家によって書かれたか、その作家の一生、ひととなりを知ることは、きわめてたいせつであります。それで初めに、解説のほうを読んでから作品のほうを読むことも、作品をよく理解することができる方法でしょう。

この解説も、それを書いた人々が、たいへん興味ふかく、親切にしるしてくれておりますのできっと、作品を読むように、みなさんの心をひきつけてくれるでありましょう。

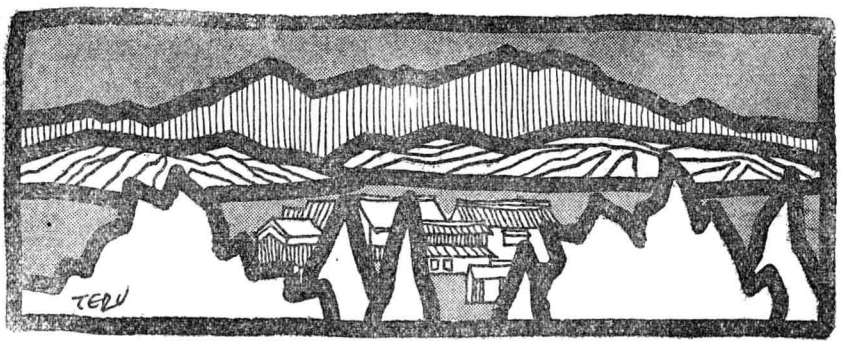
編集者　久松潜一
　　伊藤整
　　福田清人

＊本文中、唐（むかしの中国の名）のように、かっこの中に小活字で入れてあるのは、編集部でつけた註です。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

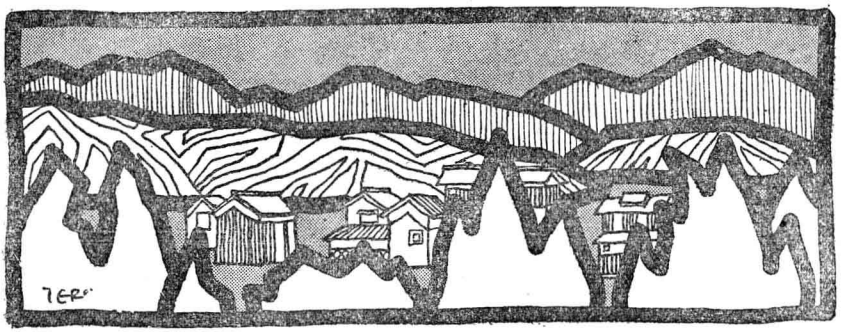
島崎藤村集　もくじ

葡萄の樹のかげ（詩）……七
母を葬るのうた（詩）……九
鷲の歌（詩）……一一
小諸なる古城のほとり（詩）……一四
労働雑詠（詩）……一五
黄昏（詩）……二〇
椰子の実（詩）……二一

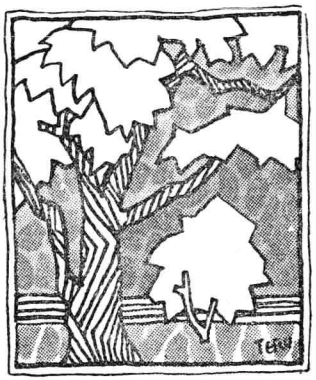


千曲川旅情のうた（詩）……三
家畜……三
千曲川のスケッチ（抄）……元
岩石の間……十八
生い立ちの記……二四
ふるさと（抄）……二六
をさなものがたり（抄）……二九
解説　瀬沼茂樹……三四

そうてい　青山龍水
カット　山本耀也



島崎藤村集



葡萄の樹のかげ

はるあきにおもいみだれてわきかねつ
ときにつけつつうつるところは

妹

たのしからずや
　はなやかに
あきはいりひの
　てらすとき

たのしからずや
　ぶどうばの
はごしにくもの
　かようとき

姉

やさしからずや
　むらさきの
ぶどうのふさの
　かかるとき

やさしからずや
　にいぼしの
ぶどうのたまに
　うつるとき

妹

かぜはしずかに
　そらすみて

あきはたのしき
　ゆうまぐれ
いつまでわかき
　おとめごの
たのしきゆめの
　われらぞや

姉

あきぶどうの
　きのかげの
いかにやさしく
　ふかくとも
てにてをとりて
　かげをふむ
なれとわかれて
　なにかせん

妹

げにやかいなき
　くりごとも
ぶどうにしかじ
　ひとふさの
われにあたえよ
　ひとふさを
そこにかかれる
　むらさきの

姉

われをしれかし
　えだたかみ
とどかじものを
　かのふさは
はかげのたまに
　てはふれで
わがさしぐしの
　おちにけるかな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

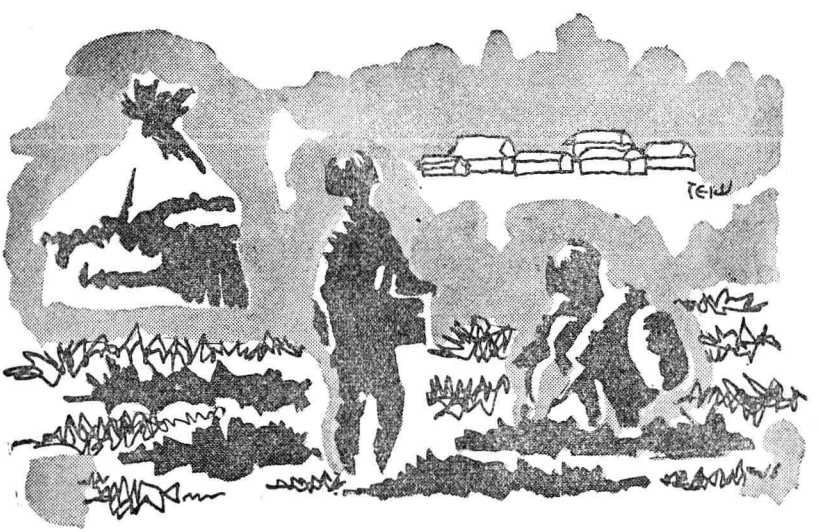
母を葬るのうた

うき雲はありともわかぬ大空の
月のかげよりふるしぐれかな

きみがはかばに
きぎくあり
きみがはかばに
さかきあり

くさはにつゆは
しげくして
おもからずやは
そのしるし

いつかねむりを
さめいでて



いつかえりこん
わがははよ

紅羅(あから)ひく子も
ますらおも
みなちりひじと
なるものを

ああさめたもう
ことなかれ
ああかえりくる
ことなかれ

はるははなさき
はなちりて
きみがはかばに
かかるとも

なつはみだるる

ほたるびの
きみがはかばに
とべるとも

あきはさみしき
あきさめの
きみがはかばに
そそぐとも

ふゆはましろに
ゆきじもの
きみがはかばに
こおるとも

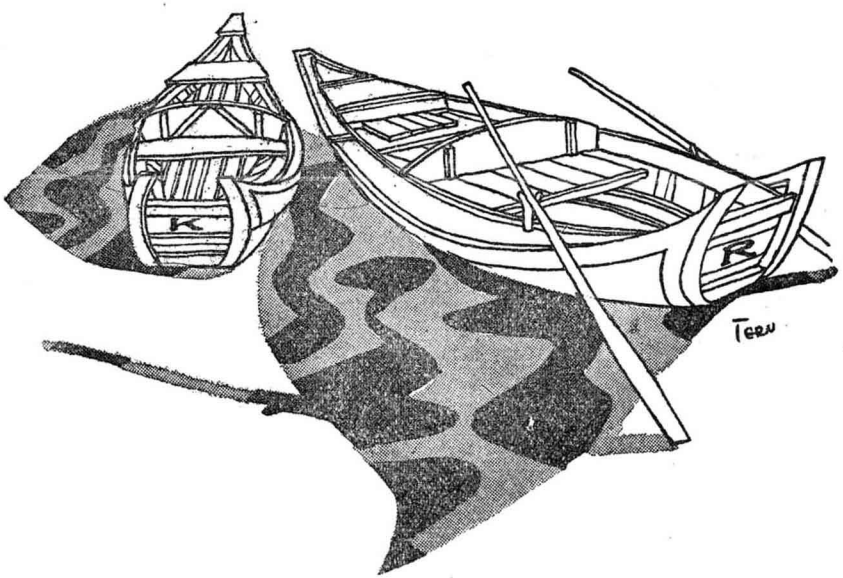
とおきねむりの
ゆめまくら
おそるるなかれ
わがははよ

鷲の歌

みるめの草は青くして海の潮の香ににおい
流れ藻の葉はむすばれて蜑の小船にこがるるも
あしたゆうべのさだめなき大竜神の見るゆめの
暗きあらしにおどろけば海原とくもかわりつつ

とくたちかえれ夏波に友よびかわすはま千鳥
もしおやく火はきえはてて岩にひそめるかもめどり
蜑はとまやに船は磯いそうちよする波ぎわの
けずりて高き岩かどにしばし身をよす二わの鷲

いかずちの火の岩に落ち波間に落ちて消ゆるまも
ねみだれかみか黒雲の風にふかれつそらに飛び
ぶどうの酒のこむらさきいろこそ似たれあら波の



波のみだれてくるいよるひびきの高くすさまじや

つばさの骨をそばだててすがたをつつむわか鷲の
身は覆羽やさごろもや腋羽のうちにかくせども
見よ老鷲はそこ白く赤すじたてる大爪に
岩をつかみて中高き頭静かにながめけり

げに白髪のもののふのつるぎの霜をはらうごと
唐藍の花ますらおのかの青雲をしたうごと
黄葉のかげに鳴くしかの谷間の水にあえぐごと
眼するどく老鷲は雲の行くえをのぞむかな

わがわか鷲はうちひそみわが老鷲はたちあがり
小川にうつる明星のすめるににたる眼して
黒雲の行く大空のかなたにむかいうめきしが
いずれこころのおくれたり高くはげしとさだむべき

わがわか鷲は琴柱尾や胸にあやなすしぎの斑の
うけ毛は白くやわらかに谷の落し羽飛ぶときも
わきて流るるましみづの水につばさをうちひたし
このめるかげは行く春のなごりにさける花つつじ

わが老鷲は肩つよく胸腹広くあふれいで
はげしき風をうちしのぐ羽はしるくもあらわれて
ふじの花かも胸の斑の髀によろいをおくごとく
鳥の命の戦いにつばさにかかる老の霜

げにいかめしきもののふの盾にもいずれつばさをば
張りひろげたる老鷲のふたたびみたびはばたきて
おどれる胸は海潮のわきつ流れつ鳴るごとく
力あふれて空高くまいたちあがるすがたかな

黒岩葺の岩ばなに生うにも似るかわか鷲の
岩かど深く身をよせて飛ぶ老鷲をうかがうに
紋は花びしまいおおぎひらめきかえるはや風の
わが老鷲をふくさまは一葉をふるに似たりけり

たたかうためにうまれては羽をつるぎの老鷲の

うたんかたんとおやみなき熱き胸よりふく息は
色くれないのほのおかもげにかなしみのわき上がり
つよきつばさをひるがえしかの天雲をしのぎけり

光をしたう身なれどもさだめかなしや老鳥の
一こえ深き苦しみのおとをみそらに残しおき
金糸のぬいの黒じゅすの帯かとぞ見る黒雲の
羽そでのうちにつつまれてすがたはいつか消えにけり

ああさだめなき大空のけしきのとくもかわりゆき
暗きあらしのおさまりて光にかえる海原や
細くかかれる彩雲はゆかりの色のこむらさき
うすむらさきのうつろいに楽しき園となりけらし

命を岩につなぎては細くも糸をかけとめて
腋羽につつむ頭をばうちもたげたるわか鷲の
鈎にもにたる爪先の雨にぬれたる岩ばなに
かたくつきたる一つ羽はそれもなごりか老鷲の

霜ふりかかる老鷲の一羽をくわえながむれば
夏の光にてらされて岩根にひびく高潮の
くだけて深き海原の岩かどに立つわか鷲は
日かげにうつる雲さしてゆくえもしれず飛ぶやかなたへ

小諸なる古城のほとり

小諸なる古城のほとり
雲白く遊子悲しむ
緑なすはこべはもえず
わか草もしくによしなし
しろがねのふすまの丘べ
日にとけてあわ雪流る

あたたかき光はあれど
野に満つるかおりも知らず
浅くのみ春はかすみて
麦の色わずかに青し
旅人の群れはいくつか
畑中の道を急ぎぬ

くれ行けば浅間も見えず
歌かなし佐久の草ぶえ
千曲川いざよう波の
岸近き宿にのぼりつ
にごり酒にごれる飲みて
草まくらしばしなぐさむ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com